

めでいかすどる  
*Médicastre*



「祭り近づく」

鶴岡地区医師会

19年 5月号

## 弥 生 会 (鶴岡地区女医の会)

福 原 晶 子

弥生会のご紹介をさせていただきます。

以前より、医師会には若鮎会や大正会などの会員親睦会があったと聞いていますが、弥生会は鶴岡地区の女医さんの親睦会です。

今から 10 年以上前に、准看講師懇談会の席で、出席されていた奥山ルミ子先生・長島早苗先生・黒澤久子先生の間で、「女医さんは仕事だけでなく家庭のことなどで忙しく、なかなか医師会の行事には出席しにくいし、顔を知っていればお互い患者さんの紹介などもしやすくなるから、女医の親睦会を作りましょう」という話が出て、発足したとのこと。当時、女医さんであれば、医師会会員・非会員を問わず、また、勤務医の先生方にもなるべくたくさん参加していただくという主旨だったようです。「弥生会」という名前は、3月のお雛さまの頃に開催しようということで、小児科の佐藤純子先生が提案されたそうです。

その後、数回の集まりがあったのち、何年かのブランクをおいて、5年前から、新たに弥生会が再開されました。

毎年、弥生会の由来どおりに3月に開催しており、再開後5回目の今年は、伊藤享子先生と鈴木晶子先生が幹事の労をお取りくださって、3月29日グランドエルサンで行なわれました。11名の出席者の前に春らしい桜色のカクテルが配られ、阿部寿美子先生の乾杯のご発声で和やかに開会しました。今年は、3月末で閉院された佐藤純子先生のお別れと、新しく医師会に入会された木根渕智子先生をお迎えしての会となりました。お食事をしながら、自己紹介を兼ねて一年間の近況報告をしたり、久しぶりにお会いする先生と色々な話題に花が咲きます。いつも患者さんのことでお世話になっている先生には、お礼も兼ねてご挨拶したり、症例の相談をすることもあります。

再開後も、医師会に入会されていない勤務医の先生も含め、なるべく多くの先生がご参加くださるようにご案内を出しています。

来年以降も、春の弥生の一夜、女性だけの気楽な懇談の会に、是非、御出席ください。



## 私のお勧めの店

その 18

横 山 靖

カレーライスも評価の難しい料理である。本格的なインド風のもの、ヨーロッパ風の洗練されたタイプ、それが日本に入ってきてまた新たに進化？した、いわゆるライス・カレーとでも呼ぶべきもの。さらにいえば、蕎麦屋の味と合わさり生まれたカレー南蛮などという和風料理まである。これらをひっくるめて、どれが一番うまいかなんて比べること自体、意味をなさないし、もうそれぞれが確立した味わいを持っている。多くの人にとって、カレーライスの最初の原体験は、母親のつくるカレーであろう。誰もが今でもその味を大事にしていると思う。しかし、世の中にはなんでも調味料を加えないと気が済まない御仁がいる。うちの父もそうだった。やたらとソースをかける。もちろんカレーにもかける。しかも、一口も食せぬうちからかけるものだから、一生懸命味付けをした母としては面白くなかったようだ。私はソースはかけないが、たまにちょっとだけ醤油をかける。怒られないよう、もちろん味見をしてからである。ちょっとだし、まあ隠し味的なものだが、味をまろやかにするように思う。

さて、今回お勧めするのは、驚かれるかもしれないが山形自動車道の寒河江サービスエリアの食堂のビーフカレー。もちろんヨーロッパ・タイプのものだが、これが滅法うまい。もちろん他の有名なレストランやホテルのカレーも食べたが、やはりここの方がうまい。日本で最初のヨーロッパ・カレーを作ったとされ、天皇陛下も食べたという函館の五島軒のカレーも、ラ・サール高校の時代よく食べた。函館の元町の坂を上り、函館山の麓に並ぶ洋館や教会の街並みを散策するのが好きだったのであ

る。その折には、この元町にある五島軒を訪れたりした。そこと比べても遜色のない味である。たかがサービスエリアの食堂と思わず、ぜひ食べてもらいたいものである。肝心の味であるが、このルーと牛肉を例えるならカレー味のビーフシチューである。まさにとろける牛肉とフォンドボーの効いた、粘り気の少ないさらっとしたルーは絶品である。ビーフとはいえ、酸味もほどよくありしつこくない。ご飯などさておき、ルーと牛肉だけをたらふく食べたいようである。山形に出張の折でも、是非寄ってみてはいかがだろう。

# マイペット&マイホビー

- 第45回 -

岡田恒人

## 阿房列車時刻表の旅

さてさて“めでいかすとる”のマイペット・マイホビーを書きませんかと依頼がきてから日が経つものなかなか題材が見つからない。マイペットが題材だと、鶴岡に転居したときに連れてきた犬が脱出し、近所の家に勝手に上がりこみソファに寝そべっていたのを発見され連れ戻されたくらいの話しかない。もし前の家に帰ろうとしたのであれば大した犬だと感心するのだけれど、くつろいでいた犬ではとても紹介などできない。なにか他人に自慢できる(?)ものは無いかなと考えてみたが、普段から勉強しているものや鍛錬しているものがあるわけではなく、今からはじめたのでは来年の“めでいかすとる”にさへも間に合わない。なー困った。そうこうしているうちにめんどくさくなって傍らにおいてある時刻表に手を伸ばし、空想(妄想)の世界に逃げ込もうとしている我が身に気がついた。そうだ“妄想鉄道・阿房列車の旅はどうだろう”ただ阿房列車の旅といっても“阿房というのは、人の思わくに調子を合わせてそう云うだけの話で、自分で勿論阿房だなどと考えてはいない。用事が無ければどこへも行っては行けないと云うわけではない。なにも用事がないけれど、汽車に乗って大阪へ行って来ようと思う。”の一節で始まる内田百閒の『第一阿房列車』のように、思い立つままに列車に乗り供を連れて出かける本当の旅をすることはできないから(出かける時間も先立つものも無いのですから)思い立ったときにすぐできて、月に1000円も出せば済んでしまう列車時刻表の旅である。これが趣味といえればそれらしくもあるので阿房列車の時刻表の旅を紹介することにす

### 1) ダイアグラムと時刻表

私が時刻表を見るようになったのは小学生3年の頃からだったと思う。その頃はディスカバリー・ジャパンなどの宣伝が流れる旅行ブームのときで、鶴岡駅を通る列車の数や種類が多くなっていった頃だった。まだ羽越本線は電化されておらず、蒸気機関車やディーゼル機関車がはばを利かせていた。毎日飽きもせず鶴岡駅や赤川鉄橋の踏み切りのところで暗くなるまで通りすぎる列車を見たり、たまに小遣いがあるときは駅の入場券を買ってホームで一日すごしたりしていた。見れない車両や臨時列車を見つけると家にある時刻表を広げて、どの列車か調べたりした。そのためか自然に時刻表を使えるようになっていた。

ところで時刻表を手にしたときに、その人は時刻表を見ているのだろうか? 読んでいるのだろうか? ほとんどの人は列車の発車時刻と到着時刻を見ているだけだと思うのだが、時刻表になれ親しんでくると、時刻表の数字や行間(こんな表現が正しいか解らないが)に對向列車、駅の風景や流れる車窓が現れてくる。傍から見るとあの数字の羅列を嬉々として喜び読んでいる姿はちょっと異様に見えるかもしれない、



しかし本人は小説を読むように列車の旅を楽しんでいる（つもり）のであるからお許しいただきたい。

数字が並んでいるのを見てそんなに楽しいのかと聴かれる事もある。（言い訳がましくなるが）時刻表の数字がどうやって決められるかを説明させていただくとすこし理解いただけるかも知れない。列車時刻はどのように決められるかというと、横軸に時間座標を、縦軸に駅と距離の座標をとった線グラフに列車運行の軌跡（スジ）が記入され作られる（写真1）。これは最小15秒間隔で駅の発着が表現され、表を見ると列車がどこを走り、どこで列車同士がすれ違うかがわかる。これを数字の表にまとめたものが時刻表となる。通常5分程度で走る駅の間が15分くらいかかる列車があると、ああここで列車の待ち合わせがあるのだなど対向列車を探したり、貨物時刻表で貨物列車を探したりする。



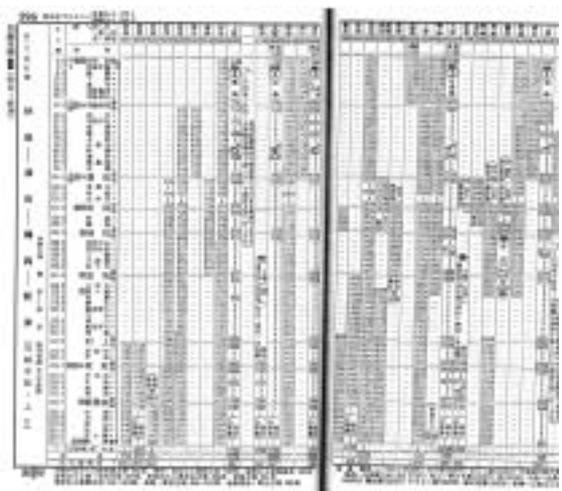
(図1)

## 2) 鶴岡⇄東京今昔+阿房列車上野行き

今は東京に行くのにANAで約1時間、列車でも4時間くらいでついてしまう。無理さえすれば沖縄にでさえ日帰りで行ける。私が子供の時（約40年前）は急行「鳥海」で朝9時11分に鶴岡を出ると上野に17時26分到着（乗車時間8時間14分）、普通列車上野行きでは17時7分に出て到着は翌朝6時32分（同13時間25分）夜行急

行「羽黒」では21時51分に出て朝6時48分到着（同8時間57分）であった。いまなら成田から米国、ヨーロッパに行ける時間をかけて東京まで行っていたことになる。だから列車に乗って鶴岡駅から東京、大阪方面へ出かけることは大イベントだった。手元にある『国鉄監修交通公社の時刻表1967年9月号』を使って当時の列車の旅を再現してみると、鶴岡から上野まで2等1枚で1550円。切符を手に入れた後は、硬いイスでの長い列車の旅の供として雑誌や冷凍ミカンを買って、パチリと切符にはさみを入れてもらいホームに立ち列車を待つ。そして藤島方向からC57型蒸気機関車に引かれてやってきた茶色の客車に乗り込み、窓際の席に座り、煤で汚れた肘掛やテーブルを拭き融けたみかんを食べながら車窓に流れる稲穂をみる…。翌朝汗を拭うハンカチは煤で真っ黒、大宮をでた列車の中では黄害防止の為（昔の列車トイレは垂れ流しでした）洗面、トイレは上野まで使用しないようにとの車内放送が流れている。うぐいす色や茶色の国電が見えて、ガタガタと多くのポイントを渡り上野到着はまもなく。といった具合である。こんな風に阿房列車時刻表の旅は続く。

最近では同好の人も多らしくNHK-TVでも特集番組が作られたりしていた。パーチャルトリップとも言うらしい。別に皆さんに勧めはしないが、こんな時刻表の使い方もあることを知っていただき、時刻表を見てニヤニヤしていても変な人と思わないでくださいとお願いして終わりとする。



## 表 紙

「祭り近づく」

真 島 吉 也

春の訪れとともに今年もまた庄内地方に祭りのシーズンがはじまります。4月の半ば頃より桜の花のにぎわいを過ぎる5月の初めにかけて庄内海岸温海地区で次々に伝統的なお祭りがあり、月の終りには鶴岡の天神様の化け物祭りがはじまり、あちこちの夏祭りに続きます。昨年のお天神祭で、街に出かけて写真をとりにまわっていたところ突然天狗様が現れて見事なポーズをとってくれました。

～ 編集後記 ～

中 村 秀 幸

ようやく春の暖かい陽気になりました。4月29日には初物の孟宗汁をいただきました。湯田川産のものは、柔らかくほんのりとした甘み、そしてきめの細かさが特徴ですね。地域の産直のお店にも山菜が所狭しと並べられています。一年で一番好きな季節です。

新年度となり、各部署にフレッシュアップが配置され、気持ちも新たに目標や豊富を設定した方も多いことでしょう。何事も、再スタートは、自分の足元や向いている方向を見つめなおす良い機会です。マンネリ化、当たり前のように頭を使わなくなったら、年齢に関係なく「脳の動脈硬化」の始まりです。

今年の春の目玉はなんとといっても、日本対がん協会が主体となって行われる通称「庄内プロジェクト」、在宅でのがん緩和ケアを地域が一丸となって支える仕組みを模索する事業です。4月28日には、その出発となる公開市民講座が開催されました。緩和医療講演会-緩和医療の最新情報を知るというテーマです。指導の主役となる国立がんセンターからは、病院長の土屋先生、がん医療情報サービス室長の的場先生らを中心にご指導をいただきます。庄内病院-医師会-訪問看護-行政-市民など地域のみんで連携を取りながらの一大プロジェクトです。2,3人に一人はがんにかかるか、がん死の時代です。不幸にして治癒の見込めないがんに直面した場合、自分の生まれた地域で、しかも自宅でも安心してケアを受けられる。なんとすばらしいことでしょうか。ぜひ、庄内が一丸となりこの事業を成功させ、全国にいや世界に発信していきたいものです。

編集委員：中村秀幸・伊藤末志・斎藤憲康・五十嵐裕・福原晶子・岡田恒人

発行所：社団法人鶴岡地区医師会 山形県鶴岡市馬場町1-34

TEL 0235-22-0136 FAX 0235-25-0772 E-mail tsurumed@mwnet.or.jp

URL <http://www.mwnet.or.jp/~tsurumed/>

印刷所：富士印刷株式会社 鶴岡市美咲町27-1 TEL 22-0936(代)